

# MAJ NEWS



Volume 6

2014

The Milton Association of Japan

MAJ News

Volume 6

2014

The Milton Association of Japan

Editorial Board

Editor-in-Chief: Koji Katsurayama

Editor: Wataru Sasakawa

Cover Photo:

John Milton by Horace Montford (c1840-1919)

(St Giles' Cripplegate Church)

©The Milton Association of Japan

# Contents

---

## 第4回 研究大会 発表要旨

### Proceedings of the Fourth Colloquium

#### シンポジウム **Symposium** 「ミルトンの交友関係」

緒言

笹川 渉

1

「偉大な監督者」ヤングとミルトン

“My great task-master”, Thomas Young and John Milton

笹川 渉

Wataru SASAKAWA

2

ミルトンとマーヴェル——パストラルの変容について

加藤 光也

5

共和制の終焉——ヘンリー・スタップとミルトン

The Decline of the Commonwealth: Henry Stubbe and Milton

小林 七実

Nanami KOBAYASHI

6

Milton と St Stephen, Coleman Street に集う者

川崎 和基

7

研究発表

**Paper**

**8**

政治思想としての<sup>プロヴィデンス</sup>神の導き

——『失樂園』と『闘技士サムソン』を読み直す——

富樫 剛

**8**

---

## 第 10 回 研究会 発表要旨

### **Proceedings of the Tenth Colloquium**

『失樂園』におけるアダムと天使ラファエルの対話

Dialogue between Adam and Raphael in *Paradise Lost*

菅野 智城

Tomoshiro KANNO

**9**

『闘士サムソン』における赦しの二重構造

Double Forgiveness in *Samson Agonistes*

堀内 直美

Naomi HORIUCHI

**11**

---

## 日本ミルトン協会規約

### **The Articles of Organization of the Milton Association of Japan**

**15-18**



**Proceedings of the Fourth Annual Conference**  
**Ferris University, December 7, 2013**



緒言  
「ミルトンの交友関係」

笹川 渉

「ミルトンの交友関係」というテーマを提示するならば、近年刊行された数々の伝記を看過することはできない。2004年、日本ミルトン協会の前身である日本ミルトン・センターのシンポジウムでは、ウィリアム・R・パーカーとバーバラ・ルワルスキーの伝記を出発点として、ミルトン像や作品を再考する試みがなされている。生誕400年にあたる2008年には、アンナ・ビア、ニール・フォーサイス、ゴードン・キャンベルとトマス・コーンズによるミルトンの3冊の伝記が上梓され、それまでの評伝に新たな彩りをそえたことは記憶に新しい。本年刊行された Edward Jones, ed., *The Young Milton: The Emerging Author, 1620–1642* (Oxford, 2013) は、従来の研究書では見られなかった、ミルトンの1620年代から40年代初頭に焦点化したもので、ミルトンの伝記批評はつきることがない。近年の伝記や批評で興味をひくのは、ミルトンをめぐる人物たちを再検討することで、ミルトン像がいまなお変容していることである。

そこで、本シンポジウムでは、ミルトンと交流のあった人物やサークルに焦点をあてることで、ミルトンの人物像や、ミルトンの著作に新たな視座を提供することを試みる。これまで議論されてきた人物やサークルだけではなく、従来のミルトンの批評ではあまり言及されていない人物も含まれるが、ミルトンとの関係について資料の乏しい人物も、ミルトンをめぐる人々の中に布置することで、思わぬ相互関係が見えてくることもあるだろう。各パネリストによる個別の議論を通じて、これまで書かれたミルトンの物語を補うことができればと考える。

---

## 「偉大な監督者」ヤングとミルトン

“As ever in my great task-master’s eyes”: Young and Milton

笹川 渉

Wataru SASAKAWA

ミルトンの経歴を俯瞰してみると、トマス・ヤングとの交流は、幼年時代から40年代半ばにいたるまで注目に値するほど長きにわたっている。後に、長老派ヤングとの宗教的な立場の違いも表面化してくるものの、若きミルトンはヤングを師として仰ぎ心酔していた。ミルトン批評におけるヤングは、ミルトンの家庭教師の一人であったことや、主教制度批判を展開したスメクティムニューアス論争について言及されるが、直接の関係を示す資料に乏しいため二人の関係を論じることは難しいことは否めない。近年では、エドワード・ジョーンズやアラン・ミラーが、1630年代後半にミルトンが通っていた教区の記録の発見に基づき、ピューリタンの聖職者サークルの中にヤングを位置づける試みもなされている。本発表では、あまり論じられることのないヤングの *Dies Dominica* (1639) と *Hopes Incouragement* (1643) のピューリタンの特質に注目し、ヤングがミルトンに与えた影響を再考した。

ピューリタンとしての立場が鮮明化した例の一つが、1630年代半ばから1640年代にかけて議論の対象となった *Book of Sports* をめぐる「主の日」の定義である。二人ともピューリタンの立場から、「主の日」の娯楽を激しく非難したが、ヤングの場合、国王が *Book of Sports* で奨励した娯楽に対する反駁に加え、「主の日」に功利的な労働を控えることも述べているのが特徴的である。ウィリアム・ロード体制を擁護する立場のピーター・ヘイリンが「主の日」における労働に対して寛容な態度を示し、その一方で、1640年代初頭の議会が繰り返し「主の日」における労働を禁じることを命じていたことなどから、娯楽の推奨によって助長された功利主義は、祝祭日をめぐるもう一つの問題となっていたことがうかがえる。

ミルトンの場合、高位聖職者が手に入れる「不道德に身につけた悪銭」を「主の日」と関連させて糾弾している。例えば、*Animadversions Upon the Remonstrant’s Defence Against Smectymnuus* (1641) では、高位聖職者が安息日を蔑ろにしたと非難し、「不道德な悪銭」(‘filithy lucre’) のために信徒を困っていると批判した。後に *Considerations Touching the Likeliest Means to Remove Hirelings Out of the Church* (1659) で、長老派が十分の一税を継続させたことに対して、「不道德な悪銭」という同じ表現を用いて、税の妥当性と安息日の道徳を同じようにとらえていると弾劾している。かつては肩入れをしたヤングの属する長老派に対し公に攻撃を加えたのは、功利主義に対する道徳と規律の欠如が許せなかったからである。

では、「主の日」の労働を戒めるためにヤングは何を説いたのであろうか。1643年2月28日にヤングが行った説教、*Hopes Incouragement* では、「主の日」の労働への戒めを述べるが、その際に言及したのが、マタイ伝やルカ伝に見られるミルトンがよく話題にしたタラントンの教訓話であった。この逸話は「ミルトンが好んだ」としてよく註がつけられるが、ピューリタンとして知られる下院議員のジョージ・アボットも *Vindiciae Sabbathi* (1641) の序文で言及しているように、十七世紀にあつて特にミルトンだけが取り上げたというわけではなかった。「主の日」に労働することは、瞑想のための時を軽視するばかりではなく、富の享樂に溺れ、公共の福祉に貢献せず、職業労働や信仰などの規律を忘れさせるという不道德性を孕むため、ミルトンをはじめとしたピューリタンは「主の日」の労働を攻撃したのである。

ミルトンは聖書のタラントンの寓話を用いて「主の日」に言及しながら、「規律」の必要性を訴え

ている。1633年に書かれたとされる匿名の友人への手紙では、タラントンの物語と「ぶどう園の労働者」の逸話に言及して、世間に出ずに隠遁生活を続けていることを弁明している。その書簡の最後に引用されたソネット7番（‘How soon hath time the subtle thief of youth’）では時の流れの早さと才能の開花の遅れを嘆いているが、ソネットの最後でも「ぶどう園の労働者」を引喩する「偉大な監督者」を手紙の文脈から考えると、その相手として読むことも妥当であろう。そして、長らく受け入れられている、ウィリアム・R・パーカーが主張する書簡の相手がヤングであるという意見にしたがえば、ミルトンは家庭教師ヤングを念頭に置いて、自らの規律を顧みていたと思われる。興味深いことに、*The Reason of Church Government* (1641) では、ミルトンが生涯の労働と考えた詩に恋愛を描いた作品を対置させ、恋愛詩の流行がそのような享樂の合法化と結びついているとした (Smith 164)。

「失明のソネット」(‘When I consider how my light is spent’) もタラントンとぶどう園の労働者の寓話を引用していることで良く知られるが、ここにヤングの影響を見て取ることができる。M・S・バーコウィッツが指摘するように、ヤングの説教 *Hopes Incouragement* では、苦難に不平をこぼすことに対して忍耐を持つように説いており、「失明のソネット」もこれとよく似た展開を持っている。ミルトンがヤングの説教を心に留めてこのソネットを執筆した可能性とともに、ぶどう園の労働者に言及したソネット7番もまた併せて考慮すべきである。

監督者のもとで労働を行うミルトンは、1640年代には蹂躪された教会を救うために説教壇にかわる教訓と気晴らしを兼ね備えた詩を提示した。逆説的にも、*Book of Sports* がもたらした「主の日」の墮落と道徳を欠いた労働が顕在化すると、ミルトンは1633年の書簡にあった隠遁生活から転換し、タラントンの使途を国と教会に向けることをはっきりさせることになった。家庭教師時代の教育から著作を通じて、忍耐強く神に仕え、励むべき労働へとミルトンを導いた「偉大な監督者」にはヤングの姿が暗示されている。

## Works Cited

### Primary Sources

Abbot, George. *Vindiciae Sabbathi, or, An Answer to Two Treatises of Master Broads. The One, Concerning the Sabbath or Seaventh day. The Other, Concerning the Lord's-day or First of the Weeke With a Survey of All the Rest Which of Late Have Written upon That Subject.* London, 1641.

Charles I. *The Kings Majesties Declaration to His Subjects, Concerning Lawful Sports to Be Used.* London, 1633.

Heylyn, Peter. *The History of Sabbath in Two Books.* London, 1636.

Milton, John. *The Complete Prose Works.* Gen. ed. Don M. Wolfe. 8 vols. New Haven: Yale UP, 1953-82.

---. *Milton: Complete Shorter Poems.* Ed. John Carey. 2nd ed. Harlow: Longman, 1997.

Young, Thomas. *Dies Dominica.* 1639.

---. *Dies Dominica, or the Lord's Day.* Oxford, 1672.

---. *Hopes Incouragement Pointed at in a Sermon: Preached in St. Margaret's Westminster, Before the Honorable House of Commons, Assembled in Parliament: At the Last Solemn Fast, February 28. 1643.* London, 1644.

### Secondary Sources

Berkowitz, M.S. ‘Thomas Young’s ‘Hope of Encouragement’ and Milton’s “Sonnet XIX”’. *Milton Quarterly* 16 (1982): 94-97.

- Jones, Edward. "Church-outed by the Prelates": Milton and the 1637 Inspection of the Horton Parish Church'. *JEGP* 102 (2003): 42-58.
- Miller, Jeffrey Alan. 'Milton and the Conformable Puritanism of Richard Stock and Thomas Young'. *Young Milton: The Emerging Author, 1620-1642*. Ed. Edward Jones. Oxford: Oxford UP, 2013. 72-103.
- Parker, William R. 'Milton's Unknown Friend'. *TLS* 32 (1936): 420.
- Smith, Nigel. "The Anti-Episcopal Tracts: Republican Puritanism and the Truth in Poetry." *The Oxford Handbook of Milton*. Ed. Nicholas McDowell and Nigel Smith. Oxford: Oxford UP, 2009. 155-73.



---

ミルトンとマーヴェル——パストラルの変容について

加藤 光也  
Mitsuya KATO

ピューリタン革命時におけるミルトンと13歳年下のマーヴェルとの関係については、最近、歴史学者の Blair Worden による *Literature and Politics in Cromwellian England: John Milton, Andrew Marvell, Marchamont Needham* で綿密に跡づけられている。しかし、詩人としての対比を考えようとすると、クロムウェルの共和国政府に参画して以降のミルトンがもっぱら散文による論争家となるいっぽう、詩人マーヴェルの場合には作詩年代が必ずしも確定できずに政治的背景との結びつけが難しくなるという問題が残ってしまう。また、1640年以降のミルトンが一貫してピューリタンの共和主義者であるのに対して、マーヴェルの場合には、最近の伝記が副題に「カメレオン」(Nigel Smith, *Andrew Marvell: The Chameleon*) と掲げるように、その政治的立場にはつねに曖昧さがつきまとう。

そこで今回の報告では、初期において二人の詩人格がよく表れていると思われる *Lycidas* と *Upon Appleton House* を取り上げ、それぞれが Pastoral という形式をどのように大胆に変容させ、あるいは利用しているかを考察し、そこに、後の二人の詩にも見られる、予言的なヴィジョンと黙示録的なヴィジョンとの根も確認できればと考えている。

John Carey, ed., *Milton: The Complete Shorter Poems*, 2nd ed., Longman, 2006

Nigel Smith, ed., *The Poems of Andrew Marvell*, rev. ed., Edinburgh Gate: Pearson Education Limited, 2007

David Norbrook, *Poetry and Politics in the English Renaissance*, rev. ed., OUP, 2002

Derek Hirst and Steven N. Zwicker, *Andrew Marvell, Orphan of the Hurricane*, OUP, 2012

---

共和制の終焉——ヘンリー・スタップとミルトン

The Decline of the Commonwealth: Henry Stubbe and Milton

小林 七実

Nanami KOBAYASHI

共和制と王制を巡る議論が最高潮に達した 1659 年から 1660 年、ミルトンは 3 つの論文を出版する。議会制開始以来 18 年、共和制政権下公職に専心した 10 年の彼の経験と考察の大成である。出版時の政権が全て異なる目まぐるしい情勢、その一方、初期散文と異なり公的立場の抑えた筆致は当時の状況をやや捉え難くする。同時期、彼の論文に強く共鳴したのがヘンリー・スタップである。ミルトンの友人ヘンリー・ヴェインの庇護のもと、スタップは多忙なヴェインに変わり多数の論文を出版、切迫した共和制政権の状況と課題を克明に伝えている。王党派や長老派から鋭い論敵とみなされ、ミルトンに憧れ共和制存続を訴えるスタップはこの時 27 歳である。彼らの論を照合させると、論文の執筆状況と目的を異なる角度から検証することが可能になる。

1659 年 1 月 27 日リチャード・クロムウエルの護民官議会にオリバー・クロムウエルに政界を追われた残余議会議員—ミルトンと親しいジョン・ブラッドショー、ヘンリー・ネヴィル、ヘンリー・ヴェーンら—50 数名が復帰する。4 月リチャード議会解散、5 月残余議会が回復すると、護民官制でなく共和制による国家樹立の法整備を求める声と王制回復を望む王党派や長老派の勢力が激しくぶつかりあう。議会は特に成果を出せず 10 月 13 日解散、政局は一層の混乱に向かう。ミルトンは 59 年 2 月 *A Treatise of Civil Power in Ecclesiastical Causes*、8 月 *Considerations Touching the Likeliest Means to Remove Hirelings out of the Church*、60 年 4 月 *The Readie and Easie Way to Establish a Free Commonwealth* を出版する。他方、スタップは 59 年 6 月 *A Light Shining out of Darknes*、9 月 *An Essay in Defence of the Good Old Cause*、11 月大幅に加筆した *A Light Shining out of Darknes* 第 2 版を出版する。

ジョン・モリルは *The Nature of the English Revolution* (1993) で 1640 年から 1660 年の理解に宗教税 (10 分の 1 税) を巡る論議の重要性を指摘し、ローラ・ブレースは *The Idea of Property in Seventeenth-century England* (1998) で宗教税論争の意味を探る。危急存亡のとき、宗教税による国家教会制度の廃止を共和制樹立の最重要項目に掲げる 2 人の声を読み解く。

川崎 和基

1660年代初めに Milton との交友関係で注目すべき人物に Nathan Paget と Thomas Ellwood がいる。Paget は医者で Cromwell の従妹の娘と結婚し、Cromwell とも交友があったようで、Coleman Street に住んでいた。そして、彼は St Stephen で教区牧師を務めていた John Goodwin の教会に出ていた。“the Great Red Dragon of Coleman Street”と呼ばれた Goodwin の聴衆には Sir Morris Abbot や Sir Issac Pennington といったロンドン市長や Leveller であった John Lilburne らがいた。Sir Issac Pennington の息子 Issac Pennington the younger は特に Paget と親交があり、Paget を通して、Milton は彼を知ることになる。そして、さらに彼らとの交友の中で、Milton は Quaker の Ellwood と出会う。

このように Paget がキーパーソンとなり Milton は Quaker などの様々な急進的思想の人物らと交友を持つことになる。

Ellwood は *The History of the Life of Thomas Ellwood, Written by Himself* で Quaker の主張や迫害される様子を描いている。その著述の中で、特に、彼自身 Milton に *Paradise Regained* の詩作の着想を与えたとされる記述は Ellwood の慢心こそあれ、Milton との親交を物語っている。

Goodwin は *Redemption Redeemed* (1651) で彼のアルミニウス主義的救済観を展開している。Milton は Paget を通して Goodwin について知ってはいたであろうが、*Redemption Redeemed* と同時期に執筆にかかったとされる *Christian Doctrine* にもアルミニウス主義的救済観が展開されている。Milton のアルミニウス主義的救済観は、Goodwin の主張とは異なるものの、互いに共感しうるところは大いにあったと言える

本発表では、Milton と St Stephen, Coleman Street に集う者との交友関係を明らかにし、その交わりを通じて、互い受けたと考えられる影響を探る。特に、Goodwin との関係ではアルミニウス主義的救済観が、また、Ellwood との関係では Quaker の主張が、それぞれ Milton に少なからず共感を覚えさせるものであったと言える。

### Selected Bibliography

- Campbell, Gordon. *A Milton Chronology*. New York: Macmillan St. Martin's, 1997.
- Campbell, Gordon and Thomas N. Corns. *John Milton: Life, Work, and Thought*. New York: Oxford UP, 2008.
- Coffey, John. *John Goodwin and the Puritan Revolution: Religion and Intellectual Change in Seventeenth-Century England*. Woodbridge: Boydell P, 2006.
- Corns, Thomas N. *John Milton: The Prose Works*. New York: Twayne Publishers; London, 1998.
- Ellwood, Thomas. *The History of Thomas Ellwood Written by Himself*. Ed. Rosemary Moore. Croydon: Altamira P, 2004.
- Goodwin, John. *Ἀπολύτρωσις Ἀπολυτρώσεως or Redemption Redeemed*, London, 1651.
- Toland, John. *The Life of John Milton in The Early Lives of Milton*. Ed. Helen Darbishire London: Constable, 1932.
- Parker, William Riley. *Milton: A Biography*. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1968.

## 研究発表

### Papers

#### 政治思想としての<sup>プロヴィデンス</sup>神の導き

——『失樂園』と『闘技士サムソン』を読み直す——

富樫 剛

マタイ書 10.29——神の許しなくしてスズメが地に落ちることはない——に見られるような、この世への神の介入を説く考えは、1640年代の内乱のなか、戦闘との関連においておおいに発展した。内乱は人々の罪に対する神の怒り、戦場における生死や勝敗のゆくえは神の意のまま、というように。あるいは、より攻撃的に、王に対する戦闘は神の怒りのあらわれ、神は王を裁き処刑することを要求している、というように。

この「神の導き」の議論は内乱期後半から共和国期にかけての政治思想史に位置づけられなくてはならない。ジョン・ウォレス、クエンティン・スキナーら（John Wallace, *Destiny His Choice*; Quentin Skinner, *Visions of Politics III*）は、軍を中心に発展した「神の導き」の議論に思想史的な重要性を見ていないが、これは誤りである。「神の導き」の議論は、上記のとおり王の処刑・王政廃止・共和国樹立という国家の大変革をもたらした軍の原動力であった。だからこそ、これに対する文民（政治家・思想家）からの反論として、ウォレス、スキナーらがとりあげる非宗教的に軍・共和国を支持する諸思想——特に、非合法的な政府に対しても身の安全・国家の平安のために服従すべし、というグロティウス『戦争と平和の法』からの議論——が発展したのであった。

この文脈でミルトンについて考えるとどうなるか。彼は『王やその他為政者たちの在位権』以降の政治論文において「神の導き」による内乱・王の処刑を称えている。チャールズ一世を裁いたのは「正義の法廷」であり、彼に下されたのは「神の剣」そのものであった（『在位権』）。

原罪と樂園喪失を歌いつつ、『樂園は失われた』（『失樂園』）は全篇を通じて武力・戦闘について語る。サタンは神への復讐・勝利への執念にとり憑かれており（1: 84-124）、神も天使たちに命じる——「反逆者たちを、炎によって、武器によって、攻撃しなさい」（6: 44-55）。これらの描写の基盤には、やはり「神の導き」の議論がある。等しく好戦的な神や神の子とサタンの違い、善悪の天使たちの違いは「神に導かれ」ているかどうか、ということだけである。1640年代のイングランドでそうであったように、「神の導き」による戦いこそが正義であり善なのである。

『闘技士サムソン』のサムソンは、「神の導きにより……偉大な勝利をおさめてきた」——「国を解放すべく神に命じられ、そのための力ももらっていた」（30-34, 633-40, 1211-13）。その彼が内から湧きあがる何かに導かれ——おそらく「神の導き」によって——「尋常ならざること」、つまり敵に対する自爆テロという究極の暴力行為に向かう（1381-83）。ゆえに「輝かしき復讐!」、最後の最後まで神は彼を支えてくださった」などとマノアやコロスは大喜びし、そして現代の読者は頭を抱えることになる（1660, 1718-20）。

以上、内乱・共和国期の戦闘・政変の原動力であった「神の導き」の議論は政治思想史上の契機として位置づけられるべきであり、また『樂園は失われた』や『サムソン』の中心的な主題ともなっている。スキナーらによる近年の研究によって古典主義的・非宗教的な思想家としてのミルトン像が確立されつつあるが、むしろ彼のうちにはこのような古典性・非宗教性と強硬な宗教性——「神の導き」に対する強硬な信奉——が併存し、そしてたがいにせめぎあっていたことを再確認すべきであろう。

  
**Proceedings of the Tenth Colloquium**  
**UNITY, Academic Community Hall, July 6, 2013**  


『失樂園』におけるアダムと天使ラファエルの対話  
Dialogue between Adam and Raphael in *Paradise Lost*

菅野 智城  
Tomoshiro KANNO

教育カリキュラムの近代化が推し進められた 17 世紀中頃において、ミルトンの『教育論』は古典中心の人文主義的な性格を有するものであり、当時出版された他の教育パンフレットとは一線を画している。ラテン語が国際的なコミュニケーションの手段であった 16 世紀以降、古典教育はその重要性を次第に増し、17 世紀に入ると社会的エリートたちによって独占されていった。ジェントリ層は子弟をイートンやウェストミンスターのような社会的にみて排他的な学校に隔離し、下層社会との交わりを防ごうとした。結果的に、下層階級への教育機会の拡大が進む一方で、階級ごとの教育内容が明確になり、社会的差別がより鮮明化することとなった。ミルトンの『教育論』に見られるエリート主義は、“our noble and gentle youth” (CPW. II. 406) の一節に見ることができる。ここでは一定の家柄や血統による限定的な教育が意識されていることは否定できないが、ミルトンが教育の目的として定めているのはあくまで国家の指導者の育成である。彼が目指すものは貴族による政治ではなく、国家を正しい方向へ導く政治である。職務を公正に、有能に、そして雅量をもって遂行できる人材育成を教育の目的とするミルトンの『教育論』は、指導者の人格的資質に重点を置くエリート教育論であるといえる。

『教育論』におけるエリート教育の精神は、『失樂園』第 7、8 巻のアダムとラファエルの対話に反映されている。これは排他的教育空間の設定と、知識の吸収における節制という点から見るができる。第 7 巻冒頭の“fit audience, though few” (VII. 31) という言葉は、大きな数字や有名な名前をただ追い求めることのない、真理や知恵といった実質的な価値を持つ少ない読者を指す。この一節は、真理や知恵を理解できない読者の門前払いを意味する。読者を拒否するスタイルは、『教育論』の“our noble, and gentle youth”という言葉と重なる。第 7 巻のアダムとラファエルの対話を始めるにあたり、“fit audience”という人格的な資質を前提とすることで不要な読者を排除し、さらに第 8 巻の序盤でイヴを退場させ、アダムとラファエルに独占される発話空間を成立させることで、エリート主義的な教育空間の排他性を強調する効果が生み出される。

ラファエルは知識の節制を繰り返し強調している。知識が過剰摂取されることで根拠のない空想が膨張することの危険性がここでは述べられる。これは『教育論』においても論じられている点である。ミルトンの批判の矛先は大学教育に見られるスコラ学的傾向に向けられている。優れた楽しい学問を無味乾燥な観念に貶めることのない、また過剰な知識を詰め込まれて知識の消化不良を引き起こすことのない教育を、ミルトンは知識の節制の中に見出したのである。『教育論』が自由主義国家実現のためのエリートの育成を目的としているように、『失樂園』のアダムは、人類を幸福へと導く者として教育されている。人間としての立場をわきまえ、知識偏重主義に陥ることなく節制をもって学び、神の使命を自覚するアダムは、単なる知識を得るだけではなく、知識の獲得それ自体の意味を知る。

ラファエルとの対話をとおして一旦エリートとして仕立て上げたアダムがイヴとともに墮落し、

悔い改めによって最終的に赦されるという作品全体の構造の中に見ることができるのは、挫折したエリートが人類を導くために真の強さを獲得するプロセスである。

Proceedings of the Tenth Colloquium  
UNITY, Academic Community Hall,  
Kobe City University of Foreign Studies, July 6, 2013

『闘士サムソン』における赦しの二重構造  
Double Forgiveness in *Samson Agonistes*

堀内 直美  
Naomi Horiuchi

ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）の劇詩『闘士サムソン』（*Samson Agonistes*, 1671）は「士師記」を原典としている。サムソン（Samson）とデリラ（Delilah）を描いた物語は数々あるが、デリラはサムソンを誘惑し裏切った悪女とみなされてきた。ミルトンは「士師記」の内容をいくつかの点で変更している。その中の一つにソレクの谷に住むデリラをサムソンの妻として描き、ダリラ（Dalila）という名前にしたことがある。ジョン・ショークロス（John T. Shawcross）は、詩における様々な読みの可能性を提言し、登場人物やその行動を再考する必要性を説いているが、特にデリラとミルトンのダリラの同一視が、様々な混乱を引き起こしていると述べている（66-67）。本発表では、悪女としてのダリラ像を再考し、それによるサムソンの英雄像を再考する。最初に、ダリラの謝罪とその愛の特徴について、またサムソンの本性とその愛の特徴について問い、両者の人間的弱さに言及する。次に、深層心理の視点から、ダリラの新たな自己認識と内面的変化について、またそれによるサムソンの内面的変化と赦す心の芽生えについて述べる。最後に、サムソンに芽生えた赦す心がダリラを赦し、人間として成長したサムソンが自分の信仰を貫き、神への義を果たし、神から赦されたのではないかと考えを述べる。ダリラの主張は彼女の視点からは誠実であるという考察により、ダリラは悪女であるというよりも、彼女自身の立場において、偽りのない人間であると結論付ける。

#### 1. 人間的弱さ

サムソンの妻ダリラは二種類の美を兼ね備えていると言える。人を誘惑し、虜にする魅力と女らしい淑やかさである。前者は人を傷つけ、後者は人を癒す可能性を持っている。この二種類の機能は獄舎にいるサムソンを様々に刺激する。ガザの獄舎を訪れたダリラの謝罪の特徴は、先ず、言葉、それも攻撃的多弁での謝罪である。これはサムソンをひどく傷つける。ダリラの謝罪はサムソンへの責任転嫁に終始しており、また言葉数は多いが、詭弁的印象を与え、一貫性のない非論理的で独善的内容である。そのため、たとえ彼女が真面目に情熱的に訴えたとしても、真の罪の認識と責任感の欠如をきたしているように見える。ここにダリラの人間的愚かさや弱さがある。

他方、ダリラの訪問を受けた時のサムソンは、感情的な言葉を発し、心がダリラへの恐れと怒りに支配されている。彼はダリラの色香に迷い、盲目的愛情のためにダリラの言いなりになった自分の弱さを認め、ダリラを恐れているのである。またそういう自分への自己嫌悪とダリラに対する怒りのために、サムソンは激しい口調になっている。ダリラの不実を非難するサムソンだが、彼自身も盲目的愛に陥り、非常に感情的で、自己中心的な議論をしていると考えられる。また自己過信と家父長的価値観に支配されていると思われる。これらすべてがサムソンの罪と人間的愚かさや弱さを表している。この両者の類似性は、後に述べる深層心理的視点からは補償し合うもので、サムソ

ンは自分の内面の他者である女性的特質である女々しさを克服する必要があり、ダリラもまた自分の内面の他者である男性的特質である独善的論理を克服する必要がある。

## 2. 内面の変化

スザンナ・ミンツ (Susannah Mintz) は、ダリラは「誘惑的『音』と静寂の能力の犯罪者」であり、「音」のみならず、「外観」でも誘惑的であると述べている (168)。まさに彼女の登場時の姿は、富を満載した豪華なタルシシュの船に例えられている。彼女はかのオディセイが耳をふさいだセイレーンの歌声に連なる誘惑的「音」の持ち主である。これはサムソンを傷つけるため、サムソンは恐れ怒り、耳を塞ぎたい声である。サムソンはこれに対して、「失せろ、消えろ、ハイエナめ！」 (748) と非常に強固な拒否反応を示す。あたかも心がダリラに向くのを、懸命に防ぐかのように、感情的言葉を浴びせる。しかしこれは必ずしもダリラが、誘惑目的でサムソンを訪ねたことの証拠にはならず、妻であればその必要もない。サムソンもまたダリラの過去の行為ゆえに行う反応である。両者の間では壮絶な精神的戦いが繰り広げられている。ミンツは彼らの姿勢と精神状態を関連づけて、「サムソンのうつむいた姿勢に対して、ダリラの真っ直ぐな態度・構えは、彼らの精神的状態の劇的具現と思われる」 (163) と述べている。これを敷衍すれば、彼らの物理的状态が精神的状态を象徴していると言える。つまり豪華な衣装とぼろ、直立とうつむき姿勢、そして目が見える者と盲人がそれである。ぼろは力の喪失と役に立たないことを、うつむき姿勢は曲がって正道を踏み外していることを、盲目は無知で正道を見出せないことを象徴している。そして豪華な衣装、直立、目が見えることはこの逆と考えられる。ダリラはサムソンより先に苦悩し悔恨し、心の整理ができて精神的優位を得て、謝罪と赦しを求めにやって来たと言える。

サムソンに対して言葉で弁明していたダリラは、彼の容赦のない頑なさから、自分の独善的言葉が通じないことに気づき、内面の男性的特質である独善的論理を捨て途中から癒しの機能として働く女らしさで、「たとえお許しをいただく保証はなくとも・・・私の軽率な、いえ不運な悪行を少しでも償うため」 (738-47) と言い、「私の力が少しでもお役に立ってあなたのお苦しみを和らげ、私にできる償いであなたの心をお慰めできればと」 (743-45) と彼の心へ訴えかけるかのように語る。ここでダリラがサムソンに語るのは、「赦し」と「償い」についてである。彼女はそれぞれサムソンに尽くしたいと主張している。また彼女は、「二倍の愛情と心遣いで一生お世話をし・・・ご老年までお仕えすれば」 (923-27) と具体的な行為による援助と心情を吐露する。特にこれは自己犠牲的献身で、妻としてできる最大の行為と思われる。ダリラはサムソンの信ずる真理、神への義からは切り離されているので、スタンレイ・フィッシュ (Stanley Fish) が述べるように、たとえ彼女が自分自身の欲望や情熱によってその愛を語ったとしても、ダリラは自分自身を誠実と思い続けて、サムソンへの愛を貫いていると言える (42)。彼女は誠実に、心からサムソンを思いやって、このように言っていると考えられる。

ダリラなりの思いやりの言葉に対するサムソンの返事は、「いやいや、いまの私の世話などやくことはない。世話など似合わぬ。お前と私は別れて久しい」 (928-29) と、感情的な言葉から人間的な血の通った言葉に変化し、彼は別れた夫の口調でやんわりと断っている。サムソンの口から出た「離れていれば許してやる」 (954) という言葉は、ショークロスが主張するように、表面的赦しで、ここでは決してまだ本心からのものではないが、サムソンの心から怒りが消えた時に、つまり「激情をすべて鎮めた」 (1758) 時、本物となると言える (75)。会った直後から、精神的戦いを繰り広げている二人だが、たとえ表面的赦しでも、これはサムソンの心にダリラの言葉が通じ、浸透して行っていると考えられる。直立とひれ伏す姿が象徴していた精神的優位と下位は、言葉で最初優位であったダリラが、徐々にサムソンに優位を譲るように、精神面でも深層心理レベルでサムソンに影響を与え、徐々に優位を譲りつつあると思われる。これは、サムソンがダリラに心を開き、怒



りが徐々に和らぎ、そのため人間として、赦しへつながる思いやりの心が芽生えてきていると考えられる。ダリラの悔悛と償いの思いがサムソンに弱さからの脱却、自己への執着と個人的憎悪から逃れる機会を与え、人間的に成長させ、彼の頑な心を寛大な心へと変えたと解釈する。

### 3. 赦しの二重構造

ミンツが分析するように、「サムソンとダリラの間の類似点は、ミルトンが彼らを描くために用いる彼らの口語様式、言葉とイメージから、犠牲者、裏切り者、そして彼らの民の潜在的英雄として信念の固い役割へ拡大する」(163)と言える。サムソンは女の奸計に、ダリラは高官らの策略に嵌まり、ダリラはサムソンを裏切り、サムソンは神を裏切ったことは明らかである。この劇詩でミルトンがダリラを妻として描いたことは、ダリラが心身共にサムソンに尽す献身に目覚める上で、また、ショークロスが述べるように、倫理的問題において、大変重要だと考えられる(77)。ダリラのサムソンへの真摯な思いは、サムソンの神への真摯な思いに通ずるものと言える。ダリラがサムソンに対する献身に目覚めたように、サムソンもまた自分の罪によって失われた神からの信頼を回復すべく、自己犠牲をも辞さぬ強い意志を宿し始めていると思われる。

「潜在的英雄」についての考察において、「英雄」としての概念は両者の間で異なっている。サムソンの英雄としての自覚は、彼らの別離の理由の一つである。またサムソンがダリラの奉仕を断ったのは、単に彼女の将来の看護を懸念しただけでなく、神によって選ばれた者としての自覚と誇りによってである。ダリラは「公益は私益に優先する」(867-68)と言い、「徳が、真理が、義務が、かく命ずる」(870)とも言っている。これらの言葉は倫理的に、また精神的にサムソンに影響を与えている。つまり彼女の言葉がサムソンを自分の義務へ覚めさせたと言える。これは家族関係である「夫婦の結婚の契りの誓い」(986)や自己よりも国と宗教への献身が優先するということである。サムソンから拒否されたダリラは自身を潜在的英雄として賛美する。サムソンにとっての英雄はペリシテ人の軛からイスラエル人を解放する、神にとっての英雄である。他方ダリラは、ペリシテの神にとっての英雄である。ここで問題になるのが「どちらの神が真の神か」(1176)という問題である。ここでも、たとえダリラが「偽りの宗教」(872)の神のために献身を主張したとしても、ダリラ自身は誠実に自分の思いを語っていると考えられる。

自分の弱さを脱するために、サムソンは表面的にダリラの言ったことを全て拒否した。またサムソンは自我を理解するために、一度自分の女性的特質を否定する必要があった。しかし、私はサムソンが精神的無意識の面で一步先んじている彼女の考えに刺激され続けていたと考える。ダリラの「夫婦の契りの誓いよりも、獐猛な破壊者から祖国を救う道を選んだ」(984-86)という言葉は、そっくり「獐猛な破壊者」を「ペリシテ人」に置きかえれば、サムソンの思いそのままである。また徳、真理、義務のみならず、国や宗教に関する彼女の言葉は、立場を変えれば彼の思いを代弁している。ミンツは「サムソンがダリラと何かを分かち続けている」(164)と強調する。ダリラが思いを込めて説得した自己犠牲的奉仕もまたサムソンを刺激していることは否めない。私は、これらすべてに突き動かされて、サムソンが神殿へ向かったと解釈する。

### 4. 結論

ミルトンの『闘士サムソン』は、人間的には英雄というより、人間の尊厳を奪われ、満身創痍で苦悩している、あまりにも人間的で弱いサムソンを描いている。その人間臭さは、裏切り者の妻ダリラの訪問で、一気に表面化した。妻に対する恨み辛み恐れが、怒りとなって爆発し、その頑なな心はなかなか開かれなかった。他方、ダリラも人間的弱みから一度は夫を裏切ったものの、良心の呵責がそうさせたと思われるが、サムソンの赦しを求めて、おずおずやって来た。彼女の男を誘惑する外見的魅力は、サムソンを警戒させるが、妻ゆえの献身的償いの訴えとさらにそれを越える神

と国への奉仕と献身の訴えは、深層心理レベルでサムソンの心に響いたと私は解釈する。たとえサムソンの心がなかなか開かれなかったとしても、また彼女の神が偽の宗教の神であったとしても、ダリラは誠実に訴えかけたと考えられる。サムソンの弱さは、ダリラとの葛藤の過程で、彼女の精神的無意識の面への働きかけで影響され、徐々に無くなり、ダリラへの赦す心が目覚めたと思われる。彼は自分の弱さを脱し、自己犠牲と義務に目覚め、神殿に向かったと考えられる。サムソンは一番の願いである赦しを神に求め、身をもって償いの行為を行った、それをご覧になった神は、サムソンがダリラを心の奥底で致し方なく赦したように、サムソンを赦されたのではないかと私は解釈する。これをもって『闘士サムソン』における赦しの二重構造と考える。

#### 引用文献

Fish, Stanley. *How Milton Works*. Harvard UP, 2001.

Milton, John. *The Complete Shorter Poems*. Ed. John Carey. London: Longman, 1997.

Mints, Susannah B. "Dalila's Touch: Disability and Recognition *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 40 (2004): 150-79.

Shawcross, John T. *The Uncertain World of "Samson Agonistes"*. D.S. Brewer, 2001.

ミルトン、ジョン『劇詩 闘士サムソン』佐野弘子訳 思潮社、2011年。

# 日本ミルトン協会規約

1. **名称** 本会は、日本ミルトン協会 (The Milton Association of Japan) と称する。
2. **目的** 本会は、日本ミルトン・センター (The Milton Center of Japan, 1975年7月18日－2008年3月31日) の事業と組織を継承し、ミルトン研究を促進することを目的とする。
3. **事業** 以上の目的を達成するために、次の事業を行なう。
  - (1) 研究大会
  - (2) 研究会
  - (3) 広報活動
  - (4) その他
4. **組織** 本会は、本会の主旨に賛同する者をもって組織する。
5. **役員** 本会に以下の役員を置く。役員を選出については付則に定める。

会長 1 名	事務局 長 1 名
事務局委員 2 名	企画委員 6 名
ホームページ委員 2 名	会計監査委員 2 名
6. **機関**
  - (1) 総会  
本協会の最高決議機関とする。議長は会長が務める。
  - (2) 運営委員会  
運営委員会は、本協会の運営に関する事項を審議する。委員長は会長が務める。運営委員会は、以下の役員によって構成する。

会長	事務局 長	事務局委員
企画委員	ホームページ委員	
  - (3) 事務局 事務局は、会計、機関誌の発行、その他の事務を担当する。
  - (4) 企画委員会  
企画委員会は、研究大会・研究会等の企画を行う。
  - (5) ホームページ委員会  
ホームページ委員会は、本協会のホームページの管理・運営にあたる。
  - (6) 顧問をおくことができる。
7. **会計**
  - (1) 会費 会員の会費は年額 5,000 円とする。ただし、学生会員の会費は 1,000 円とする。
  - (2) 会計監査  
会計監査は、原則として年 1 回、会計監査委員が行い、運営委員会および総会に報告する。
8. **規約の改正** 本規約の改正は、総会における出席者の過半数の賛成によって実施する。

## 付則 役員を選出

- (1) 会長は、運営委員会の推薦に従って、総会において選出する。任期は 3 年とし、再任を認めない。
- (2) 会長は、運営委員会に諮った上で、役員を任命する。
- (3) 事務局長は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、

最長 2 期とする。事務局委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、最長 2 期とする。

- (4) 企画委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、最長 2 期とする。
- (5) ホームページ委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、再任を妨げない。
- (6) 会計監査委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、再任を認めない。

9. この規約は、2008 年 4 月 1 日から施行する。

2008 年 4 月 1 日

2012 年 4 月 1 日

2014 年 4 月 1 日改正

# **The Articles of Organization of the Milton Association of Japan**

## 1. STYLE

This association styles itself as the Milton Association of Japan (MAJ).

## 2. AIM

MAJ, as its predecessor the Milton Center of Japan, aims to develop the studies of the seventeenth-century English poet John Milton.

## 3. ACTIVITIES

In order to achieve the aim above, MAJ conducts the following activities:

- (1) Annual conference
- (2) Colloquium
- (3) Public relation activities
- (4) Other related activities

## 4. MEMBERSHIP

Anyone who is willing to share the aim above is eligible for membership.

## 5. EXECUTIVE STAFF

MAJ has the following executive staff:

- 1 President
- 1 Bureau Chief
- 2 Bureau members
- 6 Planning Committee members
- 2 Website Planning Committee members
- 2 Financial Auditors

## 6. ORGANIZATION

- (1) General Meeting: MAJ's highest decision-making body, whose chair is the President.
- (2) Steering Committee: Consists of the President (the chair), the Bureau Chief, Bureau members, Planning Committee members and Website Planning Committee members, and considers how to conduct MAJ's activities.
- (3) Bureau: Prepares publications; handles financial and other matters.
- (4) Planning Committee: Makes plans for annual conferences and colloquia.
- (5) Website Planning Committee: Creates and runs MAJ's website.
- (6) Advisers: Called in when necessary.

## 7. FINANCE

- (1) Membership fee: ¥5,000 (¥1,000 for student members)
- (2) Financial Audit: Made once a year and reported to the Steering Committee and the General Meeting.

## 8. CHANGES TO THESE ARTICLES

Must be proposed to the General Meeting and approved by a majority vote of those present.

#### ADDENDA

- (1) The President is recommended by the Steering Committee and elected at the General Meeting. The tenure is three years, and there is no reappointment.
- (2) The President appoints executive staff after consulting the Steering Committee.
- (3) The Bureau Chief is appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years). Bureau members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years).
- (4) Planning Committee members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years).
- (5) Website Planning Committee members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and there is no term limit.
- (6) Financial Auditors are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and there is no reappointment.

9. These articles come into force on April 1, 2008.

Revised April 1, 2012

Revised April 1, 2014